

伝わるからだの探求 その2 —— 五十展転のメソッド ——

「破れ廃れ開けて出会う真実への小路」

釋 一 祐

人はどこから変わるのか？ どこからほどけて再び自然界の一部になりうるのか？

君はだれ？ 誰でもないわ、まだ。ここは何処？ 何処でもないわ、まだ。では何をしてるんだ君はここで？ 何もしてないわ、まだ。これは谷川俊太郎の「部屋」という作品の始まりです。相手から伝わりくるものに従って自然にこちらから伝わりゆくべくわき起こる自分を待つこと。常に新鮮に生活し、常に可能性に開けた処に自分を生かすこと。今回の「伝わるからだ」の探求はここから始まります。

伝えたい事がある、でもいつもそれを唐突に持出してうまく行かなかった経験。そして自分の思い通りに述べる事が出来ても、首を傾げる相手に困窮した経験。如何なる能力を持っていてもその価値を用いてくれる他者がなければ、その能力は無いに等しい。なにがそれを引き起こすのか？ これは現代人に起こりうる共通の問題であります。伝わるとはどういう事なのか……？

そこでまず、人の日常を支配しているものは何か？ について、十二因縁論にその答えを求めてみました。「現在の三因（愛・取・有）」は、今生にて培われた自我意識によって好悪愛憎を抱き、主体的に、欲するものを求め欲せざるものを避けるようにして、過去世の果報の土台の上にさらに未来の果報を招くべき「因業」を作りつつある日常。新しき自我の意識価値観に全てをゆだねるところの取捨。自我意識の責任で過去の果報をも相当に改められ、さらに

来世の果報を刷新し築き上げる原因はここから産みだされるものと示されています。

現代社会に生きる我々の自我は、恐ろしく増大して自分にとっての最大の敵と言えるほどの理論武装をして個人を社会を集団を支配しています。これは司馬遼太郎が「日本全体が大きな魔法にかけられたようだ」と言った、近代思想（分離分割のパラダイム）の支配によるものであります。

この現在の三因を左右する自我を形成するパラダイムこそが伝わりを断絶せしめているのではないか？ という仮説に立ちました。

そこで、「六識」を導入とし、特に六入におけるドグサの吟味によって自我の習慣性の破れを生む事が出来るのではないか。つまり過去の習因に囚われた日常的六道輪廻の連鎖のほどけはどこで起こせるのか。

この課題に取り組むために適した実践法は、ある演劇芸術に観る事ができます。演劇、舞台、俳優という世間一般では、偶像と妄想と幻影の世界と判断されがちではありますが、それはこの営みがありません。絵画とは「色塵・眼根・眼識・眼入」を主軸とした視覚芸術、音楽は「聲塵・耳根・耳識・耳入」を主軸とした聴覚芸術といったように、芸術はすべて人間の内的行動を具現化した創造活動であります。演劇とは六塵・六根・六識・六入全てを統合的に用いなければ成し得ない「最も高度な芸術」と言えます。つまりそれはおのずと六識の範疇を越えて第七・第八識に至ってなお、降下するか、第九識の「妙覚」へ進み入るかという醍醐味に挑む創造活動であります。

真の演劇芸術においては「過去の習因の追体験」つまり、自らの過去の出来事を大切な資源としています。ここで課題とされる「役を生活する」とは、役になりきる、成り済みます、やってみせる、デモンストレーション演技、エモーションな感情の覚醒が演劇技術であり、それを巧みにあやつれることが役者の能力であるという大きな過ちとは事を異するもので、ここにも伝道上における宗教家自身の問題解決の糸口が観えます。真の演劇では登場人物になる

のではなく、自分がそこで生活する（登場人物のおかれた状況を真実感覚をとめないかつ自分に相手に真摯に生きる）ことに全身全霊を投入している事実があります。ただ、作家が提案したその役と同じ状況ラインを踏み外さないという約束があるだけなのです。

この取り組みを実践して想起したことは「色読」でありました。まさにからだで読む、その通りに生活をするという、日蓮聖人が大切にされた本化の信行規範を意識せずにはおれません。確かなのは物語りの中で提案された状況にそって追体験しなければ見えてこない真相があるという問題です。

また、真の演劇芸術家達が、「元品の惑を破し、仏界の一部として生活する」ことを究境目的に定めて疑う事なく研鑽する事実は驚くべきことであります。彼らは、現代の日常こそむしろ役になりすまして生きている無限のまねごとの世界、魂を開くことが許されない場、一つの役ならともかく、色んな仮面を付け替えては自分を分裂させて生きている。それが人間の日常である。だからその上に舞台上で役になりすまして見せても、それを芸術とは呼べない。俳優は魂の医者でなければならぬと考えています。ここに宗教者と、現代から未来における社会に受け容れられる寺院環境をみる事ができます。

医師でもあったロシアの作家アントン・チェーホフは「真実だけが人を治療できる」と述べています。近年ノーベル財団は「ノースフィア」「散逸構造理論」という、いわゆる『回向（行なった行為は消えてしまわない、必ず還ってくる）』『一念三千論（人の内なる世界は外に広がる環境世界と繋がる一つの世界である）』を証明したかのようなこの二つの物理学の成果とその二人の研究者に賞を与えていることは、近い将来これが世俗化された時、愈々宗教に関わる者の真相が明らかにされることになります。

五十展転の伝わりを循環せしめる要因は、近代に葬られた「魂との交流」「魂への働きかけ」からの始まりと「人

としてご本仏の楽器となるための意識の調律」が可能とするのではないか。今回の探求においても拭いきれない予感があります。それは「再び一般社会のなかからご本佛にとって願わしい役割を果たす僧侶達が産まれて来るのではないか」であります。

付録

具体的取り組み内容を、ロシア演劇論スタニスラフスキーシステムに基づいて検証したプロセスを付記します。

からだ全体でのダイアログ（肉体的でなく魂との交流）

※カッコ内はスタニスラフスキーシステムに於けるキーワード

相手への身構え・身体的こわばりをとく（緊張をとる・リラックス）・五感全てを使い相手の立場で相手の思い入れを大切にして相手の存在を受け容れて相手と向い合う（注意・共感的に聴く話す（驚き！ 共鳴 無邪気）・先入観や今までの自分の見解から予測した答えを越えて、ここで生まれた方向性を採択（もしも？）・過去から先送りしてきた経験やそれによって闇に包まれていた創造的未來に於ける自分の内的外的行動ラインの真実感覚を得る（確信）・具体的行動に出る（信念）

その行動から生まれたものにそって方向性とピントと照準、着地点のヴィジョンを新たに創造し、より鮮明にする
↓これを幾度も繰り返していく。言い換えれば「受容↓分析↓判断↓放射↓追体験↓受容↓」となる。

意識的意図的行動は自我の支配を脱し得ず、固執的部分的排他的作用を起こして全く変革が起きないため、必要な修正課題を一旦潜在意識に落とし込む作業を行ない、無意識から行動が生まれる経路をとらなければならぬ。それ

は自然の一部として統合調和の方向性を持つ。

ここで注目すべきは、伝えたいものを準備はしても、一旦それを捨てて「相手から伝わりくるものを受け容れてそれに応えていく事から始める」というプロセスを踏むこと。自分は多くの他者が統合された存在であり、無我でありながら存在する実態、縁起の思想に立ちきった営みが課題となる。

内的身体行動

(外的肉体的動作ではなく、五感を伴った肉体的動作を内的に行なう)

相手を肉眼で捉えているときよりも、捉えた印象に向かい、相手を内的に視覚化し内的に触れ内的に聴き内的に能動することで、自分を忘れ、潜在意識が開き、相手に伝える為に過去が蘇り、相手に伝える為にその過去に新たな意味が与えられ、過去が昇華され、浄化される。

これらは祈り、祈念、加持祈祷の内的行動にもあたるのではないか。

バラモン思想に

現象は以下の基本から成り立つ「師の顔と光、その中にいる自分を生活せしめた、はっきりかつ鮮明なヴィジョン。アウム」の名称或いはリズムを何度も繰り返すことにより現象は強化される」とある。

これは、凡佛一如、本佛体中の我、その光明に照らされた生活の内的能動的ヴィジョンを持つこと。アは身・ウは口・ムは意 また、アは創造・ウは維持・ムは破壊 さらにアは意識・ウは潜在意識・ムは超意識。意識は世間体の檻を作り・潜在意識は感受性に染まる。人の行為(身口意の三業)と環境世界が統合される根源的(単純で軽やかな崇高にして陽気な)揺らぎの音律とテンポリズムに包まれた日常にこそ、真の創造、ありのままの生活の営みがある。

これも忘れ去られた妙覚への小道の初歩ではないか。

体験からの考察

追体験は、はじめ知性を使って提案された状況における目的を明らかにし、目的が明らかになることで課題が生まれ、その課題を達成する為の行動を見出す。そして知性を捨て、出逢った他者からの伝わりくる自己と能動的な内的行動によって交流し続けることで、潜在意識への扉が開かれて、かつての身の上の出来事と二重映しになり真実感覚が呼び覚まされ、自然の一部としての営みが始まる。これが自身に於いてはより良く生き直せる経験となる。それは囚われの自分からの脱却という成果をもたらす。

真の演劇芸術とは同じ役をこのプロセスで毎回新感覚をもって繰り返すことで、超意識へ自ずと入っていく創造活動の場。これは超課題と呼ぶ人生究極の目的を見つけるプロセスでもある。大胆な発想をすれば「元品の無明」との向き合いへと導かれる経路ではないか。キリスト教で言う「最後の審判」。日蓮聖人の示される「見思（の惑）未断の凡夫、元品の無明を起こす事これ始めなり」実現可能を前提として営まれてきた分野が現に存在し、さらなる研究研鑽が進められていることは驚くべき事実である。

異なる分野において、八識因分の心で九識果分に入る信を獲得する目的を共有できる可能性をみた探求となった。

この芸術の存在から現今社会の動向を推考するに、やはり日蓮聖人の宗教的特出を意識して止まない。

「銀河鉄道の夜」にこんなセリフがある「ありがと。私はたいへんいい実験をした。私はこんなしずかな場所です。遠くから私の考えを人に伝える実験をしたいとさつき考えていた。お前の言った語はみんな私の手帳にとってある。さあ帰っておやすみ。お前は夢の中で決心したとおりまっすぐに進んで行くがいい。そしてこれからなんでもいつでも私のところへ相談においでなさい」この言葉は宮澤賢治自身の体験をブルカニ口博士に語らせたのではないか。そし

て作品そのものが賢治の追体験を記したものでないだろうか。

平成二十一年九月七日没 恩師 故竹内敏晴先生に捧ぐ

参考文献

- 日蓮聖人「立正安国論」「観心本尊抄」「教行証御書」「治病大小権実違目」
山川智應「基督教と日蓮聖人の宗教」「法華三部経の梗概」「観心本尊抄講話」
竹内敏晴「生きることのレッスン」「動くことば動かすことば」
宮川了篤「日蓮聖人にみる虚空蔵菩薩求聞持法の一考察」
竹内日祥「宗教対話による価値の創造」
スタニスラフスキー「俳優の仕事」・シフマトフ「初歩エチュード」
トボルコフ「稽古場のスタニスラフスキー」・チェーホフ全集十二巻
カール・ユング「人間と象徴」・I・プリゴジン「混沌からの秩序」「確実性の終焉」「存在から発展へ」・トーマス・クーン
「科学革命の構造」
マンフレッド・クリューガー「瞑想 芸術としての認識」
市川浩「精神としての身体」・前田専學「インド哲学へのいざない」